

球根は、何からどうやってできるの

葉で作った栄養分が、たくわえられてできる

球根は、葉で作ったでんぷんなどの、栄養分の貯蔵庫です。地下のくきに、でんぷんをたくわえたジャガイモや、根にでんぷんをたくわえたサツマイモなどのイモと同じです。

植物は、種や、球根でふえるものが多いのです。種には、芽や根や葉ができるまでに必要な栄養分が、たくわえられています。同じように、球根にも、芽や葉が出たり、花が咲くまでに必要な栄養分がたくわえられているのです。葉が出れば、日光の力をかりて、葉緑素が水と二酸化炭素から栄養分を作り（これを光合成という）、成長していきます。

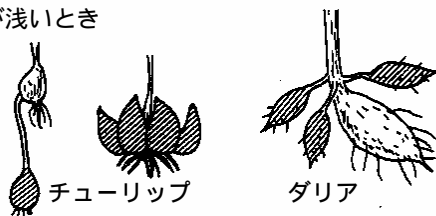
もともと、球根を作る草花は、原産地が、一年の半分くらいは雨が降らない気候の所が多いのです。そのため、花が咲いた後は、栄養分を球根にたくわえ、地上部分がかれ、次の雨の時期がくるまで、地下でねむっている植物だったのです。

種類によって、球根になる部分がちがう

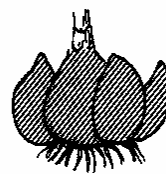
ダリアは、親イモの近くの根が太って、新しい球根ができます。チューリップでは、親球根は、花や葉の成長に栄養分を使われて皮だけになり、下のくきに、芽に養分がたくわえられた新しい球根ができます。スイセンやヒヤシンスは、親球根のわきに新しい球根ができますが、親球根が太ったように見えます。料理に使うユリの球根は、地下のくきに、葉が変化した小さい新しい球根ができるほか、親球根も太っていきます。

(監修・矢野 亮)

球根が浅いとき



新しい球根ができるもの



スイセン



ユリ

親球根が太って見えるもの

